

本能まちづくりニュース

第6・7号 平成12年12月20日発行

本能まちづくり委員会
委員長 西嶋直和

「まちなかを歩く日」開催される

～歩いて暮らせる街づくり・京都まちなか再発見～

建設省が推進する「歩いて暮らせる街づくり」が、平成12年11月17日・18日・19日の三日間、「歩いて暮らせる街づくり推進委員会議」（地域住民・事業者・市民、NPOなど多数参加）により、御池通・河原町通・四条通・堀川通に囲まれたエリアでの「歩くまち」の実現に向け実施されました。

歩きたくなるまちを作ることを目的として、元本能学区では「おいでやす染のまち本能」が本能まちづくり委員会のメンバーを中心に、大勢のボランティアの人たちの助けで実施されました。元本能小学校周辺一帯で、18日13:00～17:00、19日10:00～17:00にわたって、京染めにかかわる家の軒先を染の工程毎に色分けした5色の小旗で飾り、一部を公開工房とするとともに、元本能小学校において京染めの技を実演・工程紹介がされ、二日間で約800名の参加がありました。元本能学区では、マンションを含む世帯数約1500軒のうち京染めに携わっているのが別表のとおり190軒を占めています。

一方近隣でも色々なイベントが行われました。新町通周辺では、「文遊回廊・京の町家を訪ねて」（新町通を中心に、4軒の町家を公開。伝統ある京のたたずまいを体感してもらう）。小川通三条付近では、「中京堀川東ふれあいフォーラム」（人にやさしいまちづくりの舞台として、交流広場等で中京堀川東界あいのおもしろい取り組みを行う）。また、17日夜には「祇園囃子と町家の明かり」（演奏される祇園囃子に合わせて、新町通に面した建物からの明かりにより通空間を演出する）などが賑わしく行われました。

業態別集計（平成12年10月調査）

白生地問屋	5	黒染	7	蒸・水元・水洗	0	仕立て	8
京染卸	24	色染	17	金彩	3	紋糊置	2
染つぶし問屋	9	印染	10	刺繍	5	紋洗い	1
前売問屋	19	下絵	1	湯熨斗・張整理	11	紋上絵	9
工芸染匠	12	糸目・伏糊置	3	補正	18	縫紋章	3
京都友禅	3	挿友禅	5	仮エバ	1	その他の加工	4
誂友禅	2	引染(色・黒)	3	脱色・洗張	1	小売店	4
						合計	190

“おいでやす染のまち”に参加して

大阪平野郷 HOPE ゾーン協議会会長 松村長二郎

会長の西嶋さんから郵便物が届いた。“おいでやす染のまち”と銘打って実演展示をやるから見に来るよにとのお誘いと案内である。キャッチがしゃれていて京都らしい。染めを中心とした商店・工房が参加してそれを一見して分かるように色分けの旗印で識別し誘っている。和紙手書き風に描かれたマップも「よーわかておもしろいやん」商売柄若い頃からの職方まわりの経験から裏方の説明文を見ると大体の情景が想像される。



「ほんまかいな、平野に視察に来たのはついこないだのこっちゃで（今年2月26日）こら見に行つてケチつくな」四条大宮から堀川へ錦を右折、途端に色とりどりの旗印が並んでいるではないか。「ここもここも見られんねん」とにかく会場へ急ぐ。目ざとく見つけた役員さんが声をかけてくれる。「おぼえてはったんや」うれしい。工房めぐりのグループが次から次へと出て行く、会場設営も会員でやってのけたと言うではないか。「フーン」先着100名には手ふくさのおまけも付いてくるらしい。「えらいサービスな」来訪者が職人さんに質問している、楽しそうな対応が印象に残る。「見るほうも見せるほうも両方楽しんだはんねんや」工房めぐりに参加する。ここも歓迎ムード、双方が楽しんでる。「えームードやな」義理や厄介でないのが伝わってくる。私共が提唱する“当人が一番先に楽しまなあきまへんでー”これが実行されていた。次回には今回の来訪者が案内人となって人を連れて帰ってくることに掛け合い太鼓判。ほんまにようやんなはった、ケチのつけようがない、仲間の輪が広がって実にうれしい。

本能まちづくり委員会のロゴができました。



反物と染料の滴をあらわしています。

当日飛び入り
大歓迎！

本能まちづくり委員会の次回開催日

平成13年1月11日（木）午後7時より

ばしょ：本能自治福祉会館2階 小川通蛸薬師下ル

本能まちづくり委員会に興味のある方 西嶋直和(TEL221-6826)まで

写真で綴る おいでやす 染めのまち本能



前日と当日の朝、委員とボランティアの皆さんの知恵と力の結集で、会場設営が行われました。玄関では、秋の風情漂うしつらえが、お客様のご来場を待っています。(←)



二階作法室は新町無名舎吉田さん(明倫学区)所蔵の江戸時代の着物と区内名匠松本さんの優秀作品の展示場に変身。(→) お手伝いに龍池学区の皆さんのお世話になりました。

資料室もピカピカです。

実演コーナー



技術への誇りを感じました。二日目の夕方に、みごとに帯の図柄を完成されました。(→)

下絵 伏糊置(←) 挿友禅(↓) 絵心と地道な根気のいる作業です。「一つ一つの作業はそう大変には思いません。私はここだけして次に回します。」という言葉に、職人さんの謙虚さと、この工程は私にしかできないという



紋糊置(↑) 細かい作業です。

補正 紋章 好評だった袱紗の制作・即売。まるで手品のように、紋型が抜染されてあらわれました。集中力が必要で、声を掛けるのもためられるような緊張のひと時です。定規やコンパスも使って、細かな紋が描かれます。(↓)



紋刺繍 模様刺繍(←) 大変細い刺繍糸です。「どれくらい刺すのですか?」「模様がうまるまで。」愚問でした。器用さも忍耐力も必要です。



組紐 説明しながらもどんどん複雑な飾り結びをしていけます。飾り結び教室に早変わりして、一番簡単なトンボ結びを教えてくださいました。「左を持って。紐をここに入れて。あっ、違う。こう。この間からこの紐を引っ張る。」何度も何度も聞き返し、解いては結んで、やっと覚えた気分になりました。(←)

公開工房ツアー



公開工房ガイドツアーの出発です。区内の京染に関わる家々に工程ごとに五色の小旗がかげられました。(←)(↓) 小旗掲揚には城巽学区の皆さんのご協力をいただきました。



湯熨斗(←) 手作業と機械とが並立しています。シンプルではあるのですが、機能的で、昔からの知恵を感じさせる、からくりのような装置を操っておられます。絞りはこれでないとな風合いが損なわれるそうです。



板場友禪(←) 「往復で一反 12mの反物を貼り付け、5,6~30枚もの型を合わせ少しずつ違った色をのせていきます。6~7軒の専門屋を回って、やっと一反染め上がります。」上質の和紙の型紙が一番良いそうです。天井には何枚もの板が掛けてありました。



ぼかし染め・引染め(→) 生地の下処理の加減や、一反の染め始めと終わり、窓や戸口が開いているかどうか(乾燥の違い)で染め上がり方が異なるそうです。釜染めの均質さとは、一味違った微妙な色合いです。



釜(浸)染め 大 中 小の釜から湯気が上がっていました。夏場は蒸し風呂。(↑)染料の分量は勘に頼り、色見本片手に、布端を乾燥させては、確認・微調整。やけどに注意。光線によって色合いが異なるので、蛍光灯も特別です。(↑) じゃんけんで勝った人に袱紗を好きな色に染めるプレゼント。見学者の間で一瞬バトルが。



デジタル染め(←) 新進の平野君に最新のパソコンを使った染め方を紹介してもらいました。くっきりとした、写真のような絵柄がプリントできます。

金彩 自分で調合されたのりの上に金箔を貼ったり、金粉をふりかけ、筆と息使いだけで変化する模様を創っていかれます。53年間磨き続けられた技を見せていただきました。(↓)



先代 御当主の作品が本になっています。「私は職人で、作家ではありませんので、名前は出ません。表に出ている人はそう仕事はできないでしょう。」仕事は地味でも技術への自信。職人魂を感じました。(↑)



下絵 どの御宅も、表は普通の町家。ところが、中に入れていただくと、玄関に生花。御当主の作品展示。さながら町家美術館です。ずーっと奥に工場があったり、狭い階段を上がると、優れた作品を生み出す仕事場があったりで、京都ならではの奥深さを感じました。(←) 解説、実演のみならず、ビデオも見せていただきました。



柳水の水を一杯。(←)



街角のギャラリー(↑)も見学。どこも、足早に通る過ぎることのできない趣きを感じ公開工房ガイドツアーは1コース

巡るのにたっぷり2時間はかかりました。見学者の声「本能学区て、見るとこ多おすなあ。」「勉強になりました。」(ツアー参加者 18日 86人、19日 159人)

☆丁寧な解説を加えながら実演して下さい、日頃めったに見ることのできない企業秘密の一杯つまった工房も、快く見せて下さり、本当にありがとうございました。多くの職人さんの専門技術の積み重ねでようやく出来上がる着物の価値と魅力が一層感じられるようになりました。

☆時間の都合でレポーターが全部回れず、また紙面の都合ですべてをご紹介できず、申し訳ありません。

☆「紋描きなら日頃してるから何でもないけど、後片付けが恐ろしい」というつぶやきに反して、あっという間に元通り。お見事でした。協力して下さいボランティアの学生さんや区内の皆さん、ありがとうございました。

☆行事のあった翌日には、「お世話になりました。」「おいで下さりありがとうございました。」「ご苦労様でした。」と、挨拶が交わされます。このようなご近所づきあいが、まちづくりの基本ではないでしょうか。

参加して思ったこと

工房を公開していただいた方々

まちなかを歩く日の企画においては、関係者および本能まちづくり委員会の方々には色々とお世話になり、ありがとうございました。今回初めて公開工房を開き、土日の二日間に多数の人々が見学され、皆様には十分な説明もできず、満足していただけますには時間的なこともあり、申しわけございません。95年にBS放送で産物列島「衣を染め心を彩る京友禅」の収録ビデオを一部の部屋で皆様に見ていただき、となりの部屋では下絵の手仕事をまのあたりにみていただきました。きもの作りの原点である図案から、白生地に青花で下絵を書く様子を見ていただきました。多くの人は実際に手をふれてみたい、体験してみたい、教室でもあれば教えていただけるか、と色々なご意見がありました。おそらく今後の課題として、どの様に

展開広げていけるものかが大きなポイントになると思います。私個人としては、まだまだ閉鎖的な職人の町的に思いますが、今後の企画に期待しております。会社の商習慣で売手と作手と買手の三つがどれも同じように大切に、それぞれがだいじな部分ですが、私的には職人として手工業をしている人間にとっては、非常に不安定な昨今にいる様な気がします。見学にこられた人から、教室でも開いて下さったら、との意見がありました。職人の家では教えるスペースもないし、又別の所に場所をかりてするにしても、賃料とか管理の点でもまだまだ無知な所もあります。それでも興味のある方が多くおられることは幸いです。今後、京都市づくり推進課の方々と元本能小学校の関係者の方々のご意見なりを含め、職人達の技術を継げられる町づくり京染の拠点となることを切に望みます。(絵師 高岡由充)

「ウーアー！」「ヤッター！」という喚声の後、一瞬静まり返った。工房の中で何が起こったんや? と目を凝らしてみると、そこには白いズボンの裾を古代紫に染めた男性が呆然と立ちすくんでいました。アア、やっしてもた 可愛そうに。そんなに狭くない工房なんです、さすがに一度に3班も重なりと肩と肩とがぶつかり足元がおろそかになったんでしょうね。わざわざ京都に来てこんなことになるとは。でも考え様によっては、いろんな意味で心に残る出来事になったと思います。染まった白いズボンとともに。

さて、公開工房ですが普段の仕事を見せるだけの事とは言え、どの様に説明すれば良くわかってもらえるかな?と、色々考えていたのですが、いざ始まってみれば、この本能学区を代表するかの様な個性的なガイド役の方々の引率のもと順調に進み大変よかったです。中には、こちらの代わりに説明から何まですべてをしきって下さった方や、こちらの説明の後更に、職人の立場からの意見や気持ちを代弁していただいた方、また終始黙ってこちらの説明を聞かれていた方など、そのキャラクターの違いを見ているだけでも楽しい時間でした。普段見慣れている仕事も一般の人の何げない質問や感想によって、あーこういう見方もあるんだな! と気づかされ、改めて違った方向から自分の仕事を見つめ直すことが出来、とても良い経験をさせて頂いたと思います。ありがとうございました。(印染 土山真典)

自分の仕事を人々に観てもらうなんて、少し恥ずかしい気持ちと喜んでもらえるのかなという気持ちもありましたが、お受けしました。当日はたくさんの方が来られ、意外にも熱心に質問されたり興味深げに観ていただきました。一人でも多くの人々に袴や袴の事を知ってもらえる良い機会になりました。本当にありがとうございました。(袴製造業 多田 修)

実演していただいた方々

私は、11月19日だけだったので、見学者の四割位が私の仕事(刺繍)に関して、この部分を縫うのに何時間かかるのか、針は何本使っているのか、縫っている糸は最後どう処理するのか、などの質問がありました。その都度説明していたのですが、長い時は、10分近く話している時もあり、家で一人でやるよりも、張り合いがありました。また見学者の多くは、このような実演を見るのは初めてだと言われていたが、私も初めてその作業を見る仕事もあったので、自分自身勉強になりました。また、このような機会があればと思っています。(刺繍業 片岡 信)

「あんた、紋屋さんやったんか!」と日頃顔見知りの人から思いもやらない声を掛けてもらい、このイベントで地元の人にも見ていただいたことは大成功ではないでしょうか。本能の素晴らしさと区民一人々の絆の深さを「再発見」した思いです。次回も参加させてもらい、墨による紋章上絵の技術を皆さんに見てもらいたいです。(紋章工芸 前田正敏)

ボランティア参加していただいた方々

「おいでやす 染めのまち本能」に参加して 今回私の担当は、ふくさの販売で好みの色と紋を選び実践し仕上げたものでした。それぞれの家紋にかかわらず遊びと楽しみのある企画でした。はじめ型をぬいた綿布にいてねいに紋を筆で描く技術は大変なものです。目の当たりして細かな手作業に驚きました。一人一人の手作業と皆んなの協力あっての文化とあらためて感じます。また IT 情報・ハイテク技術ともてはやされている反面、手で感じる京都の技はますます輝いていくと確信します。(山田 山田功子)

今回ボランティアに参加していただき、本能の歴史や伝統文化に改めて驚かされています。本物の職人技や作品に直にふれると、この「職人の町」をずっと受けついでいかなければならないという気持ちにさせられます。私のように新しく住民になった者でも気軽に参加させていただき、とてもうれしかったです。(古西町 西村淑子)

編集後記 第1号が発刊されてから1年、6・7号合併号としてお届けします。「写真で綴るおいでやす染めの町本能」はいかがでしたでしょうか。まちなかをあるく日、町中を時がゆっくりと流れているように思えました。まもなく21世紀が始まります、よいお年をお迎えください。 M.O